

中国海軍ニュース：中国海軍は、まもなく艦上発射型巡航ミサイルを装備する
漢和防務評論 20190209(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国海軍は、近々YJ-18G 艦上発射型対地攻撃巡航ミサイルを装備します。
このミサイルを装備することは、中国海軍の戦略が”遠洋進攻”型となり、
地球上のどの地点も精密攻撃が可能になります。
中国海軍の第一の攻撃目標は台湾東岸の軍事施設であり、台湾の F-16 戦
闘機の作戦半径外から長距離巡航ミサイルを発射することになります。



写真説明：H-6K に搭載された YJ-18 と DF-10 巡航ミサイル
艦上発射型巡航ミサイルは YJ-18 シリーズの改修型である可能性がある。DF-
10 はサイズが大きい。(漢和防務評論ネット版 20190209 より転載)

KDR 香港特電：

何度も確認された情報であるが、中国海軍はまもなく 055 型ミサイル巡洋艦
(CG) に初めて艦上発射型対地攻撃巡航ミサイル (YJ-18G) を装備する。複数の
権威筋は次のように述べた：現在 093B 核攻撃潜水艦 (SSN)、及び 052D ミ
サイル駆逐艦 (DDG) 上に装備している YJ-18 は対艦型である。

すなわち潜水艦対水上艦、水上艦対水上艦型の YJ-18 である。しかし 095SSG、
055 の時代になると、任務の必要性から海上から発射する長距離巡航ミサイル
を装備し、陸上目標に対する精密攻撃が可能になる、と。

現時点では、未だ（本記事作成時までは）配備されていない。その理由は最後
のテストが進行中であり、第二代の北斗衛星航法システムの完成と 055 の就役
を待っているからである。YJ-18G 型の最大の相違点は、誘導システムにあり、
今後ミッドコースの誘導は慣性誘導+北斗システム、終末誘導は、レーダー画像

照合、地形照合等多種類の計画がある。これで中国海軍の現在の水上艦、核潜水艦が装備するミサイルの性能、目的、任務が概ね確認できる。

また権威筋は次のように述べた：YJ-18G への換装は、中国海軍の戦略の変化を意味する。安易に行ったのではない。周知のとおり、中国海軍の戦略の変遷は三代目になる。初代の戦略は、沿岸防御と称した。二代目は、近海防御と称した。三代目の海軍戦略は、遠海防御と称し、ある理論書では遠洋攻撃と称している。

中国海軍の戦略の変遷について、KDR は過去に何度も論じてきた。ここでは簡単に反復するが、基本任務は、「世界のいくつかの戦略的に重要な航路、水道、海峡における円滑な通航を確保し、中国の海外投資、国民の生命、安全等々を確保する」ことである。

艦載ミサイルの種類、任務の変化を見ても中国海軍の戦略が大きく変化したことが分かる。同時に装備品の開発の方向も海軍戦略の変化を示している。

052D や 093B は依然として海上殲滅戦を重視し、艦隊の水上、防空、対潜安全を確保しようとしている。したがって主に YJ-18 長距離対艦ミサイルを装備している。このほか艦船の設計上の制約から 052D が多重任務を実行するのを不可能にしている。全部で 68 個の垂直発射機しかなく、艦対空ミサイルは少なくとも 48 発以上配備する必要がある、このほか対艦型 YJ-18 ミサイルは 16 発以下であってはならない。これは満載時の基本弾数である。しかも Y-8 対潜ミサイルは艦対空ミサイル HQ-9B を捨てなければ、基本搭載弾数を確保できない。

ここで改良された 051C 型（舷番号 167）DDG を見てみよう。YJ-12 超音速対艦ミサイル 16 発に換装され、垂直発射機を採用していない。見るところ、基本的作戦意図は依然として洋上での殲滅戦である。1 艘しかいないため、モデルとするには不十分であるが、ひょっとして今後 052C 型 DDG の改良は、YJ-12 を YJ-62 に換装して射程、速度を増す方式を沿用するかもしれない。すなわち垂直発射機を採用できない水上艦は高速で射程大の YJ-12 に換装する。YJ-12 の本来の設計理念はロシアの KH-31A 及び 3M-80E から来ている。したがって改良の理念も同じである。

このように見ると、052D の全体火力は、米軍のイージス艦に比べるとはるかに劣る。

055 は 112 個の垂直発射機がある。ある種の説によると：ロケット軍の DF-10 型巡航ミサイルは、海軍の水上艦に搭載できる、と。現在このような形跡は見られない、或いはテストの形跡もない。垂直発射機がなければ DF-10 を収納出来るか。

055 が大量に就役するまでには時間がかかる。現在 1 艘目がテスト中である。したがって YJ-18G の配備は同艦が完全に就役してからであろう。KDR の推測では 2020 年前後になろう。この時期は、095 戦略核潜水艦の生産が一段落

している。

YJ-18G の配備は、中国海軍の戦略が遠洋防御（実際上は遠洋進攻）、すなわち中国版の”海を経由する対陸”戦略への転換が完了したことを意味する。

YJ-18G は誰を攻撃するのか？

ここで、ある事件から話を始めねばならない。1名の中国人人質が2017年シリアのISによって殺害された。中国は如何なる対応もしなかった。なぜか？KDRは次のように理解している：中国軍は、犯人を捉えようとしたりISの軍事施設を攻撃しようとしなかったわけではない。”検討はしたが、対策案が策定できなかった、能力がなかった”のである。

この点は、当時KDRが予想した通りであった。いかなる軍事的手段でISを攻撃するか？中国はロシアではない。後者は、重要な時期に強大な戦略打撃能力を見せつけることができる。イスラム国攻撃のために、空中からは2種類の戦略爆撃機により射程2000KMの巡航ミサイル攻撃を行った。ロシア海軍はカスピ海の水上艦から同様の巡航ミサイルを発射した。

中国はこのような長距離戦略爆撃機を保有していない。地縁関係から、陸上配備巡航ミサイルで中東の目標を攻撃することはできない。海上には艦上発射巡航ミサイルは保有していない。KDRの分析によると、唯一可能な攻撃方式は：新疆地区に配備されたDF-26のような中距離弾道ミサイルにより通常弾頭で攻撃することである。しかしDF-26も2018年になってから小規模だが正式に配備が開始された。これは官側の報道である。米国は、中国が射程500乃至5500KMの中距離弾道ミサイルを大量に生産し、配備したことを理由にINF条約を脱退しようとした。

しかもDF-26を使用してイスラム国を攻撃することは、国際政治、外交に対する影響力は巨大である。弾道はいくつかの国の上空を通過するので、万が一失敗した場合は、収集がつかなくなる。

したがってYJ-18Gを装備した後の中国海軍は、理論上、全地球上の目標を精密に攻撃できる能力を具備することになる。その戦略対象はどこか？

第一、当然、台湾である。KDRは何度も説明したが、台湾東岸の軍事目標に対する攻撃は、中国海軍の装備開発の最重点目標になっている。

長距離巡航ミサイルは、台湾のF-16戦闘機の作戦半径外から発射しなければならない。したがって095、055/YJ-18Gを開発する上での第一の攻撃目標は台湾東岸である。攻撃方式は、非接触型攻撃である。

第二、また台湾問題である。一旦米軍が介入すると、主要な前沿陣地は当然グアム島である。中国がDF-26を開発する目的は、いわゆる”関島快通（グアム島急便）”のためであり、095型SSNは、理論上、グアム島に接近し、YJ-18Gを発射することができる。055については、米中海軍の実力差が巨大であるので、遠洋での決戦は勝算がない。当然これは理論上の話であり、現在の国際関係の枠組みでは、大国間で大規模衝突が起こる可能性は少ない。

第三、同様に台湾海峡での衝突である。米国が介入すると、中国海軍 095 は、ハワイ、米海軍の太平洋、インド洋の大型軍事基地及び島嶼に対して YJ-18G による巡航ミサイル攻撃を行う可能性がある。

第四、周辺国家については、空中発射 KD-20、ロケット軍の DF-10 巡航ミサイルの攻撃範囲内にあり、YJ-18G は必要がない。見るところ、YJ-18G は主として遠海進攻の戦略理論を遂行するために用いられる。

第五、航路の安全と、海外投資のための” 一带一路” の安全を維持するため、またイスラム国が中国公民を拉致したような事件が発生した場合、055、095/YJ-18G は、現実的な威嚇戦力を構成することが可能であり、必要時には攻撃する。

KDR が以前から予測していた通り、YJ-18 は完全なロシア兵器の” クローン技術” である。すべての開発理念は、ロシアの CLUB シリーズから来ている。すなわち 3M-14/54 の各種変形である。中国は、3M-54E 潜水艦発射型対艦ミサイルを獲得し、それを複製した。ロシアの 3M-14 対陸地攻撃巡航ミサイルは、イスラム国攻撃に際し、巨大な戦力を発揮した。

多少説明を加えると、現在の 052D/E は YJ-18G を搭載しないが、必ずしも将来にわたって搭載しないわけではない。作戦上の必要性に対応するのは極めて容易である。鍵になるのは、052D/E の位置づけである。それは上文において説明している。

以上